

題 名 「厚真の虎毛 トラクマ」

投稿者 吉岡政昭

住 所 早来大町 1 4 1 - 4 7

I 部 虎毛復活が見えた

一章 虎毛が生きている

茶の間で電話が鳴っている。

一度鳴り止んだ電話が繰り返し鳴っているところを見ると同じ人物がかけているのだろう。

平蔵は枕元正面の柱時計を見た。

七時をほんの少し回っただけである。

「元旦そうそう早いなあ。誰だろう。」

平蔵は茶の間にいるはずの妻のハツが電話に出るのを当てにしていた。

「それにしてもハツはどうしたのだろう。早く出ればいいのに。」

そう思いながら元旦早々電話をよこしそうな顔を思い出そうとしたが見当がつかない。

かすかに残っている頭痛を気にしながら「除夜の鐘を聞きながら空けたあの一本が余計だったか。」と自分に言い訳をしながら電話の主を気にしていた。

「まあ、どっちにしたって大した話じゃないだろう。」

平蔵はそう思うことにして布団の中に肩を沈めた。

除雪でもしていたのだろうか。やっとの事でハツが電話に出た。

「どうも、お待たせしまして・・・明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。いえいえ、こちらこそ。・・・まだ寝ているのですが・・・。」

ハツの声がとぎれとぎれに聞こえてくる。

間もなくしてハツの近づく足音がした。

「お父さん。お父さん。」

ハツの声がすこし上づっているように聞こえた。

「農協の美笛さんから電話です。虎毛が生きているそうですよ。」

「虎毛が生きている？」

平蔵は耳を疑った。

「虎毛がまだ生きている？まさか。そんな馬鹿なことが。」

平蔵は丹前の襟を正しながら、はやる心を打ち消すかのようにゆっくりと電話口に向かった。どうせガセネタに決まっている。喜んだあとでやっぱり違って、なんていうことが目に見えている。そうなったときの自分がいかにも惨めだ。

平蔵はいつもの平静さを取り戻して受話器を取った。

「平蔵さん？」

明るいまるみのある声が飛び込んできた。

「平蔵です。いやー、どうも今年もよろしく頼みます。」

「いえいえ、こちらこそ。ところで平蔵さん！」

挨拶なんぞ、どうでもいいと言わんばかりに本題に切り込んできた。

「今朝のタイムス、読みましたか？あつ、平蔵さんの所はタイムスじゃありませんでしたね。タイムスに虎毛のことが出ているのですよ。虎毛が厚真町の幌内（ほろない）にですね、つまりオニキシベのですね、坂間さんという家に生きているって言うんですよ」

「へえー、どうしてまた、そこにいるのだろうか？ いや、つまりその、どんな経路でその坂間さんという人の所に渡ったのだろうか？ 虎毛は「安姫」の子が死んで終わったはずなんだけどね。」

平蔵は「安姫」が生んだ虎毛の子の死んだ日のことを思い出しながら言った。

「安姫」は赤毛の北海道犬ではあったが、母親が虎毛の「厚美」、祖母が「富姫」という特に優れた虎毛の血統にあった。

特に「富姫」は平蔵が最も惚れ込んだ虎毛の北海道犬だった。

だから、「富姫」の流れを汲む「安姫」に虎毛のオスをつけて良い虎毛のメスを得、虎毛の繁殖・保存を計りたいと考えていた。しかし、「安姫」の所有者からは交配の承諾を得ることがなかなか出来なかった。そうした中、平蔵は繰り返し懇願し、6年目にしてやっと「虎王」（虎毛のオス）との交配の許可を得た。そして、ついに生まれた子犬。虎毛オス、メス各1匹ずつと赤毛のオス1匹。予想通り、ついに、虎毛のメスを、しかも虎模様が左右そろった見事なメスの虎毛を得たと歓喜したのだった。

平蔵は、一連のそうした日々を改めて思い出していた。

ところが、子犬が生まれて1週間ほどたって連絡が入ったのだった。

「子犬の様子がおかしい。」

平蔵は急いで「安姫」の所有者宅を訪れ虎毛のメスを見て驚いた。やせこけてぐったりしていた。今ごろの子犬は、乳をたっぷり飲んでもっとまるまるしているものだ。それが、あまりにもやせこけていた。

「乳を飲んでいない」

平蔵は直感した。「安姫」は8歳。高齢出産だった。それにしても、「安姫」はもともと乳の出が悪かったのだろうか？ オスを見ると、やせてはいるが、2匹とも比較的元気だった。

「少ない乳を取り合いしたのか。オスの方が腕力が勝っていたのか。」

平蔵は思った。

「ミルクを買ってくる！」

平蔵は自転車に飛び乗り走った。折しも、みぞれを含む冷たい雨の日だった。

子犬が生まれて9日目、メスの虎毛が死んだ。

あの時の落胆を平蔵は忘れてはいない。これで「厚真の虎毛」は絶滅したと思った。

昭和50年のことだった。

ところが今、あれから7年目にしてあの虎毛が生きているというのだ。

ここで読者は、平蔵がオスの虎毛に全く関心を示していないことに疑問を持つかも知れない。これには二つの理由があった。一つは、このとき生まれたオスの虎毛は、繁殖に使えるような「きれいな虎毛」ではなかったのだ。もう一つの理由は、これが特に重要で決定的な理由なのだが、虎毛の保存を目的として繁殖を計画する時は、メスであることが絶対条件なのだ。つまり、しっかりしたメスを土台にして優れた・必要な形質を持った様々なオス犬との交配を重ね、目的の虎毛を作り出すことが出来る。子犬の管理もすることが出来るのだ。繁殖の土台となるこの役割はオスでほとんど不可能なのだ。

「平蔵さん。タイムスにはこう書いてあるんですよ。いや、すぐお持ちしますが・・・さわりの部分だけ読みますね。」

美笛は落ちついた声でゆっくりと新聞を読み始めた。

『Tさんのまとめによると現在町内の北海道犬は約一二〇匹。保存会でおさえている虎毛はわずかに1匹。厚真川に沿って市街から一六キロ入った幌内地区の坂間源三郎さん（六二歳）の飼い犬「富」（雌三歳）がそれだ。献上犬にあやかってニックネームはピン子』。

ここでいう献上犬とは大正天皇が皇太子の時に献上された虎毛の厚真犬の事である。

電話の向こうで、読み上げる美笛の顔を思い浮かべながら平蔵は目頭があつく来て来た。

この話が本当なら虎毛の絶滅を防げるかも知れない。遠くにかすかな光が見えてきたような気がした。

美笛は無類の犬好きで、言うなれば「犬仲間」だった。

しかも職場では、ずっと年下の後輩に当たり自分の部下として働いていた。

そして、何よりも「厚真の虎毛を守ろう、育てよう。」と協力し合った同志でもあった。

「虎毛が絶滅してしまって本当に悔しい。」と何度、語り合ったかわからない。

「メスなんだね？」

「はい、そうです。メスです。それにまだまだ、いろいろ書いてあるんですよ。坂間さんという人と虎毛が散歩している写真も大きく出ていますよ。これからこの新聞を持っていきますが、よろしいですか？」

十分ほどして美笛がやって来た。

「確かに・・・」

平蔵は写真に写っている「虎毛」を見て言った。

「白黒写真なので縞模様ははっきりしないけれどね。・・・耳が大きいね。それに鼻面（はなづら）が長いね。ハチが狭いのかな？」

ハチとは耳と耳との間隔のことで、耳間の広いものをハチが広いと言って尊んだ。

一般に額が狭く耳間の狭い犬は神経質で臆病な犬とされ反対に耳が小さく耳間が広く頭蓋骨の発達した犬は猟能に優れているとされていた。

北海道犬は他の中型日本犬に比べて耳が小さく耳間の広いものが多いのだ。

美笛は言った。

「鼻面が細身（ほそみ）で口吻（こうふん）が細いので間違いないと思いますが・・・」

「この分だと咬合（こうごう）に問題があるかも知れないね。でもとにかく、雌だというからこれはお手柄だよ。」

「それにしても新聞記者もなかなかやりますね。今年の干支が戌年だからって犬物語の特集はわかりますが、厚真の虎毛を見つけるとは驚きましたね。」

「いや、本当だね、新聞記者の中にもかなりの犬好きがいるんだね。しかし、よくあの山奥から虎毛を見つけ出したもんだね。もう厚真の虎毛は絶滅したとばかり思っていたんだけどね。」

平蔵は安堵感に浸りながらも、次第に大きな不安が頭をもたげて来た。果たして坂間さんという人に虎毛の繁殖に協力してもらえるだろうか？「安姫」の二の舞になったら・・・あの時の失敗が思い出された。

あの当時、自慢の北海道犬を飼っていた家が多くあった。そして互いに犬を見せ合ったり批評し合ったりしていたが、同時に心の中では犬の品定めもし自分の犬との比較をすることなどもしていた。

そして、交配は自分の飼い犬と対等以上の良犬とだけ行うと考える者が多かった。

気持ち的に言えば名馬の種付けの相手選びの気持ちと似ているかも知れない。

そうした傾向は「厚真の虎毛」がどんどん減少し対策の必要性が叫ばれるようになってからも払拭することが出来なかった。

当時から「厚真の虎毛」は希少価値が高く獣猟性の優れた系統でありながら犬仲間の間では必ずしも評価が高くなかったのだ。

だから、「厚真の虎毛」が絶滅の危機にあっても交配をスムーズに進めることが出来なかった。

しかし、この度は何と言ってもメスの虎毛である。

いろいろ交配させて子犬を直接、手に入れることが出来る。その後の交配の計画も立つ。平蔵は突如訪れたチャンスに心躍らせた。

今度こそ犬仲間に「厚真の虎毛」の繁殖の重要性を訴え、広く協力を得なければならない。

稀少価値の高い地犬（じいぬ）の絶滅を防ぐことを犬仲間の共通の目標にしなければならない。

「ところでその坂間さんという人、どんな人だろうね。」

「そうですね・・・」

美笛は平蔵の顔を見て言った。

「平蔵さんの願いを理解してくれるといいんですがね。これは私たち共通の願いなんですけどね。それを十分、理解して協力していただけるかどうかですね。」

「そうだね。その犬を譲ってもらえるだろうかね」

そう言ったあとで「いや、譲ってくれなくともいいんだよ。ただ、繁殖をまかせてもらえるだけでいいんだけどね。もちろん、必要ならお金を払っても構わないんだけどね」

平蔵は言った。今度こそ虎毛の繁殖者としてまかせてもらいたい。

そして、十分な管理をして、とりわけ勇敢で且つ慎重な優れた獣猟犬としての「厚真の虎毛」を絶滅から救いたい。

只只、そう思わずにはいられなかった。

平蔵には「厚真の虎毛」に特別な思いがあった。

昭和21年春、当時、平蔵は20歳。伐採業務の「帳場」をしていた。

帳場と言っても、事務所に引きこもってソロバンをはじいているだけの仕事ではない。時期になると毎日、伐採作業員と一緒に山に入った。

道のない山林や雑草を切り倒し道をつけながら伐採現場を広げていった。

そんな中、時折、うっそうとした山に突然、草木がなぎ倒された「道」に出くわすことがあった。「熊の道」だった。

当時、伐採作業員達の入山の際は、必ず二匹の北海道犬を供にした。

「赤毛」「白毛」「虎毛」「胡麻毛」「黒褐毛」と色々いたが同じ毛色でも気質はそれぞれ違っていた。

「熊の道」に出くわした時、それらの犬は異なった反応をした。

多くの北海道犬はすこぶる勇敢で何食わぬ顔をして林の中をわけ入ったが、北海道犬の中には先頭を歩くのを嫌う犬。ぴったり人間にくっついていかにも臆病風に吹かれていますものもいた。

憶病で神経質な犬を「シャイな犬」と呼んだが、「厚真の虎毛」には全くそれがなかったのだ。

ある時、川辺の石に熊の足跡が濡れたままの状態であっていたことがあった。

今しがた熊がここにいたのだろう。

伐採作業員達は一瞬緊張し辺りを見回したものだだったが、厚真の虎毛は熊の新しい足跡の臭いを嗅いだ後、悠然と先頭に立って進む姿に肝の強さを感じたものだった。

「すごい犬だ。」と思った。

その時の記憶が今なお鮮明であった。

二章 虎毛の繁殖

1月3日、平蔵と美笛は坂間宅を尋ねることにした。

正月早々、三が日も明けぬのにと、かなりのためらいはあったが、早く虎毛を確認したいという気持ちや虎毛の繁殖の許可を得たいという一心からこの日の訪問となった。

訪問に当たっては、あらかじめ坂間宅の場所を聞いていたが、どうもはっきりしない。そこで、坂間と同じ地域に住む犬仲間の石崎に尋ねるべく訪問した。

美笛と石崎は初対面だったので挨拶だけ済ませたあとは、二人の会話のやりとりをただ聞いていた。

平蔵は石崎との会話から坂間宅の虎毛が他ならぬ石崎からのものであることがわかった。

「ああ、新聞に出ていたあの犬ね。あれはね、私の所の克狼の子なんだよね。坂間さんは富と言う名前をつけたんだね。」と石崎は言った。

「ええ！すると、何だい？あの犬は富姫の孫って言うことかい？」

「そうだよ。」

「それはすごいなー。」

平蔵は感激にも似た気持ちで聞いた。

富姫は毛並み、気質、動き、どれをとっても他に追随を許さぬ優れた虎毛だったからだ。しかも、死んだ安姫と同じく富姫の孫だったのだ。

「ところで、その富の母親はなんて言うの？」

「それがねー」と言ってから、いかにも困った風に言った。

「わからないんだよね。とにかく虎毛なんだけどね。我が家に迷い込んできた犬でさ。欠点の多い犬だったんだよ。耳は大きいし、目は丸いし、耳間は狭いしね。それで、気

をつけていたんだけどね。知らないうちに克狼とつながっちゃってさ。それで2匹産んだんだけど、1匹死んでしまってね。そしたら坂間さんが番犬に欲しいというのでね、引き取ってもらったというわけさ。」

「なるほど・・・その犬、血統書は取ってあるのかい？」

「いや、取ってないと思うよ。坂間さんはそういうことにあまりこだわる人ではないし、そもそも母親の血統がはっきりしないからね。」

いずれにせよ、平蔵は貴重な情報を事前に得ることが出来て喜んだ。

富という虎毛は「克狼」「富姫」とさかのぼり曾じいさんの「富虎」も曾ばあさんの「虎姫」も含めて全て虎毛だ。虎毛の血をかなり濃く持っている事は間違いない。これからは血統書を確認しながら虎毛と血のつながっている犬や良い形質を持った犬との交配を重ねれば、「厚真の虎毛」を復活できる。繁殖を任せてくれさえすれば成功するだろう。

平蔵は石崎の話から自信を深めていった。

美笛は車に乗り込むなり言った。

「すごいことがわかりましたね」

「そうだね、大収穫だよ。」

平蔵と美笛は石崎宅を出て教えられたとおりの道を進んだ。

間もなくして山道から奥に入った所の一軒家にたどり着いた。

家の前は少し大きめの広場となっていた。坂間宅に着いた時、車の左側に放し飼いになっている一匹の犬がいた。

犬は吠えることもなく、さりとてしっぽを振ることもなくゆっくりと歩きながら近づいて来た。

犬は紛れもなく新聞写真の虎毛だった。

「この犬だ！」

平蔵は思わずつぶやき急いで車から降りた。

運転していた美笛も後に続いた。

平蔵と美笛は虎毛に近づいた。

犬は自分に対し警戒心を持たず攻撃の意志もなく親しみだけの目に出会って静かにしっぽを振った。

「この犬ですね。やっぱり虎毛ですね。」

美笛は言った。

平蔵はしゃがんで虎毛の首をなでながら犬の特徴を色々見ていた。

「ストップがかなり浅いね。まちがないね。」

平蔵は言った。

ストップとは鼻と額の間のくぼみのことで、北海道犬の特徴の一つにこのストップの浅いことが上げられていた。

平蔵はいきなり犬の口を開け舌と歯並びを見た。

「舌斑（ぜっばん）も大きいな。切端咬合（せったんこうごう）だね。」

そう言いながら「歯並びは母親の影響かな。克狼にはなかったはずだから」と言った。

「いずれにしても虎毛の血をかなり濃く持っている犬だから大事にしないとね。」

平蔵は美笛に言った。

その時、客の到来を察知した坂間が家から出てきた。

「どうも・・・失礼します。私が電話を差し上げた山村平蔵です。」

「美笛です。」

それぞれ挨拶を交わした。

お互い初対面なので堅苦しい挨拶となったが、坂間の勧めで二人は家に入った。

「遠くからご苦労様です。」

坂間が改めて言った。

話の始まりは今年の雪はいつもより多いなどの話を交わした後で、平蔵は訪問の目的を言った。

「今日伺ったのは他にもありません。電話でもお話ししましたが、こちらに虎毛が生き残っているのを元旦の新聞で知りまして驚きました。もうとっくに虎毛は絶滅したとばかり思っておりましたので本当にびっくりしまして・・・」

「そうですか。私はそんな貴重な犬だとは知らずに飼ってきましたが・・・。」

「こちらの犬は石崎さんの所から手に入れたそうですね。先ほど石崎さんから聞きましてね。道を尋ねるのに寄ったのですよ。」

「そうですか。おとし石崎さんから頂いたのです。番犬が欲しかったものですから。ところで、先ほど犬の口を開いていましたね。何を見ていたのですか？」

「歯並びを見たのですよ。富の歯を見ましたら切端咬合というものでした。上下の切歯の先端が直接かみ合っているものをそういうのです。正常でないということになっていますね。」

「そうなんですか・・・どうなっているが正常なのですか？」

「正常な歯のかみ合わせを正常咬合というのですが、下あごの切歯を上あごの切歯が軽く覆っているような状態を言います」

「全然、気がつかないというか気にならなかったのですが、そういうことが大事になるのですか？」

「そうですね、展覧会などでは減点と言うよりも失格になりますね。これは口吻（こうぶん）が細いことに関係があると思うのですが、先ほど言った切端咬合の他に反対咬合というのがあります。これはブルドックのように下あご門歯が上あご門歯の前に出ているものを言います。切端咬合が顕著なのは虎毛の特徴で欠点とされているものなのですよ。」

「他にもあるんですか？アイヌ犬の特徴は。」

「そうですね。アイヌ犬は目が三角形でつり上がった小さな目をしているのが多いのですが、虎毛の場合は丸い目をしているのが多いのです。富も丸い目をしていますよね」

「そうですか。私はそのあたりのことはよくわかりませんが、とにかく番犬として飼っているだけなのです。」

【この富は大事な犬です。ご承知の様にこの犬は「厚真の虎毛」と言われているもので、この厚真町にしかない犬です。特定の地域にだけ生息する犬を地犬（じいぬ）と言いますが、虎毛はそういう犬なんですね。私が仕事で山歩きをしている時に、虎毛の勇敢さと利口さに感心していましたね。今でもその時の印象が忘れられません。それでこの虎毛が絶滅したと思った時は、本当にショックで悲しかったですね。】

「・・・ところで、お願いというのはどんなことですか？」

坂間が聞いた。

そして続けてこう言った。

「この犬は売れませんよ。」

坂間は笑顔で冗談っぽく言ったが、本心からそう言っている風だった。

「ええ、わかります。ただ、私は先ほど申しましたようにこの「厚真の虎毛」を絶やしたくないのです。それで、売って頂かなくとも結構ですから、繁殖を私に任せて頂きたいのです。」

「・・・それは構いませんが、具体的にどういうことですか？」

「つまり、私に交配を管理させて欲しいのです。そして、虎毛の子孫を増やししながら、また必要な改良をしながら残していきたいのです。」

平蔵は「厚真の虎毛」の保存についての思いを熱く語った。

坂間はしばらく考えてから言った。

「わかりました。富は山村さんにお任せしましょう。」

「えっ、本当ですか？そりゃ、有り難い。有り難うございます。安心しました。」

平蔵はそう言った後でおそるおそる聞いた。

「ところで、大変失礼な話なのですが、お金はどのくらいお支払いすればいいでしょうか？」

「お金？ですか。そんなものいりませんよ。死んだじいさんの言いつけですよ。」

坂間はここでも冗談っぽい言い方をした。

「アイヌの古い話にありますが、欲にたけて犬を扱うと犬から仕返しを受けるという話がありますからね」

坂間は笑いながらそう付け加えた。

「そうですね。そんな話がありましたね」

平蔵は坂間がアイヌ民譚集「パンペ銀の子犬を授かる」の話のことを言っているのだと思った。

話が一段落して平蔵はしみじみ言った。

「今日は本当にうれしいです。願いを聞いて頂いて。必ず「厚真の虎毛」を絶滅から救いたいと思います。いま、川上犬のことを思い出して同じ事が起こりそうだと思うので感動しているのです。」

「川上犬ですか？初めて聞きましたが。」

「そうです。川上犬と言います。柴犬の一種ですね。大正時代から長野県の天然記念物となっていた犬で、ニホンオオカミを祖とする日本犬と言われております。この犬が当時の川上村の村長さんの努力で戦前、50頭近くまで回復したのですが、太平洋戦争の時の食糧難のため軍から撲殺命令が出てほとんどいなくなったそうです。戦後になって密かに生き残っていた最後の川上犬が死んでしまって、一旦、絶滅したとされたのですが、その直後、八ヶ岳の山小屋で生活する人から「預かっていた川上犬を返したい」という申し出が元村長宅にあったのだそうです。なんでも死んだ元村長が、戦時中の撲殺令から逃れるために八ヶ岳で暮らすその方に川上犬をひとつがい預けていたのだそうです。その犬に子犬も生まれており川上犬は生き延びていたのです。今は、全国で約200頭くらいになっているそうですが、その川上犬も地犬なのです。地犬などの希少価値の高い犬種は意識的に保存していかないと絶滅するおそれがあるのです。地犬は雑種化を含めて絶滅の危険がいつも存在しますので日常の気配りが大事だと思っています。」

「なるほど、そうですか・・・ところで・・・川上村って何処にあるのですか？ 私は地理にうといものですから・・・。」

【長野県ですね。千曲川源流域にある村ですが、レタスの生産量が日本一の村と聞いています。私は「厚真の虎毛」の新聞を見た時、川上犬のことを思い出してここでも奇跡が起こったと思ったほどでした。】

【そうですか。今の話を聞いて私もうれしいですよ。「厚真の虎毛」の保存に尽力を頂ける方が現れて感謝の気持ちで一杯です。こちらこそよろしくお願い致しますよ。】

平蔵と美笛は礼を言って坂間宅を離れた。

平蔵は幸せ一杯になっていた。同時に責任の大きさも感じていた。

「きっと成功させてやるぞ」平蔵は改めて心に誓った。

しかし、「富」が「厚真の虎毛」の純系として必ず認められるはずだとは思ってはいるが、母親が登録されておらず、従って、今のままでは、すんなり血統書を取得することは困難だと思った。

従って認定のための条件や手順、方法に関して北海道犬保護団体の指導と援助を受けなければならない。間違っても血統書を偽造してはならない。正直に事実に基づいて取り組む必要性を感じていた。そうしなければ、貴重な犬種の血統を自ら絶滅に追い込むことになってしまう。

平蔵には血統書を信じて購入した犬が、実は違っていたという苦い経験があったからだ。

以後三年間、平蔵は「富」をスタートに、三代にわたって虎毛の子が生まれる事実を示し、「富」の純系を証明しなければならなかった。そして、虎毛としての血統書の登録を果たさなければならなかった。

平蔵は虎毛の子が生まれるたびに、家1軒1軒、審査員I氏を案内して歩いた。またある時は、北海道犬保護団体の理事長であるG氏のもとを「富」を伴って訪れ「厚真の虎毛」の認知と理解に努めた。

そうしたねばり強い努力の甲斐あって、北海道犬保護団体から「富」を「厚真の虎毛」の純系としての認定を受け血統書の交付を得たのだった。

なお、血統書登録に際しては富という名前は幌姫と改めた。

血統書登録の命名の決まりは特になく「犬名は漢字または仮名を用いる」とだけになっていたが、サロマ号など北海道の地名をつけるもの、カムイ号などのアイヌ語を用いるもの、それに雄雌がわかる文字を当てるなど様々あった。こうした観点からすれば富という名前は少々、工夫がいるのではないかと思われた。

平蔵は坂間とも相談の上、幌内という場所で見つかったメスの北海道犬という意味から幌姫と名づけたのだった。

三章 日本犬の絶滅

平蔵は多くの日本犬が絶滅をしたことを知っていた。明治以降、国内では洋犬が飼われるようになった。

次第に混血が進み、昭和に入ると、各地で日本犬の保存運動が起こった。

国は昭和6年に秋田犬、9年に甲斐犬、紀州犬、越（こし）の犬、12年に北海道犬、土佐犬（四国犬）、柴犬の計七種を天然記念物に指定した。

しかし、越（こし）の犬（福井県・石川県・富山県）は、天然記念物に指定されたにも拘わらず、その後、数が減り1971年には純血種が絶えた。

このように絶滅した地犬は越の犬のほかにも高安犬、津軽犬など数多くいた。

因みに、東京上野の銅像、西郷隆盛がつれている犬（名はツン）は薩摩犬であるが、すでに絶滅している。

いま平蔵は「厚真の虎毛」に限らず北海道犬そのものが、絶滅の危機にあると考えていた。

過去にも二度、危機に遭遇した。

最初の危機は明治時代、開拓のために本州からやって来た人達によってもたらされた。

アイヌ人は彼らをシャモと呼んだ。

シャモは北海道に渡るとき様々な犬をつれていた。日本犬、洋犬、それに雑種までが、やって来て北海道犬との雑交を進めた。その結果、北海道犬の純度が急速に失われ雑種

化が進み純粋な北海道犬の絶滅が心配された。

2度目は第2次世界大戦であった。

戦争さなかの昭和18年2月、犬皮献納運動が全国的に行われた。

東京八王子では警察署から「何が何でも皆さんの犬をお国に献納して下さい。犬の特攻隊を作って敵に体当たりさせて立派な忠犬にしてやりましょう」などの隣組回報が配布された。

犬の毛皮は軍人の外とう（軍需毛皮の増産確保）に、肉は食料または肥料への有効活用とされた。

北海道犬は特に毛皮が良質であったためターゲットにされた。

資料の中には戦争末期、全国で抛出された犬はわずか2か月で1万7千頭とするものや5万頭の軍用犬が戦地にかり出されたという記録もある。

また、昭和16年4月、警視庁は食肉営業取り締まり規制を改訂し犬肉を食用として販売出来るようにした。

そうした中、犬肉は露天の焼鳥屋、牛の煮込み屋、馬肉屋などに運ばれた。また、犬肉を3分の1混ぜたものを馬肉として売られたとの指摘もある。そんな頃からであろうか。

犬肉の「うまさ」に順位をつけ「1シロ、2アカ、3クロ、4ブチ。ブチがなければモクでも良い。」と言われたものだ。ブチとはまだら毛の犬、モクとは毛の長い犬のことである。

日中戦争のさなか、第75回帝国議会衆議院予算委員会において「犬猫不要論」を説く議員も現れた。曰く「犬猫を撲殺してはどうか。軍用犬以外の犬猫は全部殺してしまう。そうすれば、皮は出る飼料はうんと助かる」と。

犬にとっても戦争中は受難の時代であった。そうした中、一般人が犬を飼うことは肩身の狭い思いをしたものだった。

献納運動の中、犬の抛出に消極的と思われた者は、周囲から非国民と非難されるケースもあった。

国中が食糧難になってきたとき、犬の餌に事欠くのは当然であった。

昭和16年、雑誌「航空朝日」の11月号に「日本犬のお勧め」という広告が出た。

その中に「犬には昔、糠（ぬか）を食わせた。昔の飼い方に戻ろう」と呼びかけた。つまり、犬には米や肉は不要であるというキャンペーンであった。

軍の「犬の撲殺命令」による川上犬の絶滅の危機はこうした事情の中で起こったものだった。

いま、平蔵は北海道犬そのものが第三の絶滅の危機にひんしているのではないかと思えてならなかった。

平蔵が所属する北海道犬保護団体の登録数が毎年減少していた。

団体の登録記録によれば1970年当時5849頭いた北海道犬が、1980年には

2188頭、1990年には1508頭、2000年になると765頭となっていた。

現在では700頭を割っているかも知れないと思った。

北海道犬が生まれると血統書欲しさから登録がなされるが、死んだ時の抹消手続きがスムーズに行われることは少ない。

だから実数はこれよりはるかに少ないに違いない。

他団体の登録数は把握していないが、減少傾向は変わらないのではないかと思った。

確かに昨今では、ペットとして室内で飼う小型犬が好まれるようになった。

鹿撃ちや鳥撃ちの際も猟犬はポインターなどの洋犬が用いられることが多いように思う。

こうした背景が北海道犬減少の要因になっているのだろう。

平蔵は時代の流れの中で北海道犬が第3の危機にあるように思えてならなかった。

そうした中、地犬である「厚真の虎毛」の保存と繁殖はとりわけ重要に思われた。

【絶滅したとされる地犬】

津軽犬（青森県）、岩手犬（岩手県）、高安犬（山形県）、会津犬（福島県）、越後柴（越後犬とも、新潟県）、十石犬（群馬県・長野県）、秩父犬（埼玉県）、赤城犬（群馬県）、阿波犬（徳島県）、肥後狼犬（熊本県）、椎葉犬（大分県・宮崎県）、山仮屋犬（大分県・宮崎県）、綾地犬（大分県・宮崎県）、日向奥古新田犬（宮崎県）、日向犬（宮崎県）、薩摩犬（鹿児島県）、甕山犬（鹿児島県）、屋久島犬（鹿児島県）、大東犬（沖縄県）

なお、三河犬（愛知県）は絶滅寸前であり子犬の入手は困難とされている一方で、すでに絶滅したという報告もある。